

仏誕二千五百年記念
花祭の記

奉白文

維時、昭和九年四月八日、恭しく聖誕を敷き、大恩教主釈迦牟尼世尊の金蓮台下に、合掌三拝して謹みくゞて白す。

竊に以みるに婆娑世界は無明の業風涯しなく荒み、生死の波限りなくおこる。故に一切群生海は、唯永劫の苦悩に輪廻して出期あることなし。されば四流を無碍の智剣によつて断じ、煩惱を大悲によつて転じ給う大覚の出世によるにあらざるよりは、いづくんぞ生死海を度することを得べき。然るに、生死常没の有情に牽かれ、法爾自然の大地におされて、久遠実成阿弥陀仏、涅槃寂靜の樂より来生して仮に衆生の相に同じて、神を聖母摩耶夫人の胎に借り、迦毘羅城の王子と示し、ルンビニーの逍遙に當つて無憂樹下に降誕あらせらる。時あたかも春四月八日、一指は天を指し、一指は地を示して、七歩を進めて天上天下唯我独尊と叫び、仏陀降誕の聖威を示し給いしより己来、既に二千五百年を経たり。我等今日、仏誕二千五百年の聖日に値うことを得たる、歡喜何ものかこれに如んや。

憶うに、世尊はじめ、太子悉達多として王宮に処し、群籍を貫練して文を学び、射御を示現して武を講ず。然りと雖も、老病死に驚いて世の無常を悟り、国と財と位を棄てて山に入り、勤苦六年つぶさに苦行精進の一路をたどり給う。されど満されざるを知り給うや、山を下りて尼連禪河に沐浴し、供養に肉体を養つて、菩提樹の鬱蒼たる処、大磐石をもつて道場となし、結跏趺坐して金剛心に住し、魔群と戦つてこれを降伏せしめ、遂に無上正覚之志願を満足して釈迦牟尼如来となり給う。

爾来八万四千の法輪を転じて、一切衆生の業苦を度し給い、象歩の如き聖蹟を生死界に印現し給いぬ。されどあくまで群生に随順して、八十歳にして涅槃の雲にかくれ給うと雖も、法身常住にして法輪永へに流れて、二千有五百年、連綿として法燈伝え輝き、億々の衆生、彼岸に度す。わけても、龍樹天親の巨聖西天に現われて仏陀の真意を開闡し、中夏に至つて、鸞、綽、善導と示し、日域に及んで横川の楞嚴院の化風となり、やがて吉水の聖と現じて、遂に親鸞聖人に至る。我等その靈孫として念仏行に生き、時は二千五百年を隔つと雖も、処は西天東土と離ると雖も、直ちに靈鷲山上、大無量寿經の会座に列り、世尊の大寂定に合掌して、飽くまで日夜にその教法を聞く。歡び何ものかこれに加えん。

誠に大般涅槃の光輪こそ、人類永遠の理想にして、長く人類文化の源泉となり、唯一最高の指導原理となる。仏陀によつて残されたる大衆無我の大道こそ、人類道義の根底として、永遠に大地に輝き、国土莊嚴の華と咲かん。

我等もとより渺たる一俗なりと雖も、身を大乘相応の日域に享け、宿縁多幸にも、遙かに仏弟子の光悦を獲たり。我等誓つて教主世尊の教化により、本仏弥陀の本願に生き、無我報謝を信順に顕し、以つてこの高恩に酬い奉らんとす。ああ、教主世尊、永へに化育照護を垂れ給い、我等が使命をして全からしめ給わんことを乞ひ奉ると、今日の聖日に當つて謹んで爾言う。あなかしこく。

昭和九年四月八日

住岡狂風
敬白